

令和5年度を振り返って



栃木県中学校長会長
宇都宮市立一条中学校長
増山孝之

卒業式を間近に控え突然の学校休業となった日からもうすぐ4年が経とうとしています。昨年5月、新型コロナウイルスが5類感染症に移行したことで、学校における対応も緩和され、力強い教育活動と生徒の元気な声が戻ったことは大変うれしいことです。一方で、今年度はインフルエンザの流行や「地球沸騰化」という言葉に象徴される記録的な暑さ、突風や豪雨による被害など、予測を超える事態も多く、学校現場は常に緊張感の中にあり続けていたような気がします。

さて、4月に「将来を見据えた中学校教育と中学校長会の新たなステージづくりに取り組む」と申し上げて会長に就任しました。今は、この一年でどこまで進めることができたのか自問する日々であります。が、「将来を見据えた」に関しては、いくつかの課題の解決に向けて一歩を踏み出すことはできたのではないかと考えています。

8月に行われた県教委との教育懇談会や10月の県教委・県立高との懇談会では、総務部や進路対策部を中心に校長会としての意見を集約し、しっかりと要望することができました。特に、校長はもとよりすべての教職員や子どもたちにとって大きな課題となる①「県内統一グループウェア導入を（高校入試

に関わる事務の改善と併せて）教育DX推進の柱の一つとして検討すること」②「部活動の地域移行を『青少年の健全育成のあり方を社会全体としてどうするか』という視点で検討し方針を示すこと」③「定年延長に伴う暫定再任用制度を管理職等の経験を生かしたものに直すこと」の3点を新規重点項目とし、県教委からは概ね好意的な回答をいただきました。

一方、校長会自体も会費や基金等の課題を検討し、校種の別なく全ての会員が等しい負担となるよう改定することができました。ある会員から掛けられた「後輩のためになるよう」になったとすれば、皆で議論した甲斐があります。

今年度は、関地区中、全日中の研究協議会が山梨県甲府市、大分県別府市で、4年ぶりに参集形式で開催されました。他の都道府県の校長先生方と様々な形で意見交換や交流ができ、大変有意義な機会となりました。更に、本県からの参加者が集う「県人会」を催せたことも大きな成果であったと思います。各地の郷土料理に舌鼓を打ちながら交わす校長としての理想、各自が抱える課題に関する情報交換は、電波を通してでは決してできない久しぶりの新鮮な体験となりました。今後も、中学校長会が真剣で楽しく、温かみのある集団であってほしいと思いました。

結びになりますが、各地区校長会、各専門部の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、栃木県中学校長会にご支援、ご協力をいただいたすべての皆様に心から感謝を申し上げます。令和6年度が皆様にとって実りのある一年となりますことをお祈り申し上げます。

事務局だより

新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行し、学校教育活動においても、子どもたちの元気な声や笑顔が多くなってきたように感じられます。しかしながら、それでもコロナやインフルエンザ、熱中症等、子どもたちの健康安全への対応には、これまで以上に、大変苦労された1年間であったと存じます。

こうした中、会員の皆様のご協力により、多くの事業等をコロナ禍以前と同様の規模で進めることが

できました。また、皆様からのご意見をもとに、会費の改正に取り組むなど、改めて校長会運営等の課題に着目することもできました。昨年度、中学校教育75年を迎え、会長が描いている「中学校長会の新たなステージづくり」の一端となったと強く感じています。

今後もより良い教育活動が展開されるよう、会員の皆様の連携、協力のもと、本会が更に充実した活動になるよう努めてまいります。

(事務局長 松本 良雄 事務局員 松井 昌子)

❖❖❖ 県教委との教育懇談会 ❖❖❖

総務部長 清水 久美子
(宇都宮市立田原中学校長)

日時：8月3日 場所：ホテルニューイタヤ

今年度は、小・中校長会35名、県教委側は16名が懇談会に出席、終了後には教育長をお招きして4年ぶりに懇親会も実施しました。

【中学校長会提案事項】 主な内容とその骨子

1 教職員人材確保と教職員配置の改善

- (1) 教職員の勤務条件・待遇の改善
- (2) 正式採用教員の確保（欠補の段階的解消、臨時的任用経験期間を考慮した特別選考の検討）
- (3) 免外及び臨免対応解消のための会計年度任用職員の増員・配置
- (4) 補充教職員配置に対応するための柔軟な採用と前倒し配置に関する拡充と周知徹底
- (5) 学力向上、生徒指導、不登校対応加配の拡充
- (6) 特別支援学級担当教員の育成と正式採用教員の配置の推進、並びに教員の配当基準の見直し
- (7) 個別支援充実のための会計年度任用職員増員
- (8) スクールカウンセラーの勤務日の更なる拡充と資質向上

- (9) 暫定再任用制度における、経験を生かせる勤務内容や勤務条件、待遇等の見直し

2 確かな学びを育む教育の充実

- (1) 個別最適な学び、協働的な学びの推進のための環境整備
- (2) 教育DXの推進に資するICT支援員の配置

3 学校の働き方改革推進のための環境整備

- (1) 教員業務支援員の配置継続、専門能力スタッフの配置促進
- (2) 県内統一校務運営システムの導入

4 アレルギー対応のための学校栄養職員の適正配置

- (1) 栄養職員の配置基準の引き下げ、及び食物アレルギー対応の充実を期した栄養職員の配置増

5 運動部・文化部活動の在り方に関する方針に基づく取組の推進

- (1) 運動・文化部活動指導員の増員と人材確保
- (2) 地域移行における学校・行政・関係団体等との連携強化と具体的なスケジュールの提示

6 その他

- (1) 教職員の研修履歴記録システムの構築
- (2) 研修等に係る出張旅費の確保

県教委からは、国への要望や県の施策の充実について可能な限り努力する旨の回答がありました。

県教委・高等学校長会との懇談会

進路対策部長 青木 均
(塩谷町立塩谷中学校長)

令和5年10月24日(火)、とちぎ青少年センターにおいて県教委、県高等学校長会と県中学校長会との懇談会を開催しました。そこで、①一日体験学習②出願手続き③入学者選抜方法④その他について、新規の要望及びこれまで要望してきたが多くの中学校長から根強く上がってきている要望（23項目）を中心に、協議や情報交換を行いました。

主な回答は以下のとおりです。

1 一日体験学習について

実施要項に受付方法や受付場所、駐車場等を共通項目として設定するよう、また、高校によって申込みの様式が異なるため統一した様式になるよう要望した。回答は、「中学生が迷うことの無いよう各高校には周知していく。様式等についてもできる限り県で示した様式を使うよう、引き続き依頼していく。」であった。

2 出願手続きについて

インターネット出願については、その利便性を

十分理解しており、県としてもシステム構築に向け、できるだけ早い段階で導入できるよう、関係部署と相談しながら検討を進めている。

一般出願時の受検票交付(即日交付)については、現在の方法で実施すると待ち時間が一層長くなることが予想される。電子出願と併せて検討していきたいが、現在の方法では即日交付は厳しいことを理解いただきたい。

3 入学者選抜方法について

受検辞退は明記されているが、合格後の入学辞退も明記してほしいと要望した。回答は、「特色選抜は合格内定後、入学を確約できるものと明記されている。一般選抜については合格後の入学辞退を妨げることはできないと考えている。」であった。

4 その他

外国人生徒の受け入れにおいて、入試の方法や高校の学科等について検討を求める要望に対して、外国人生徒が増加している状況を踏まえ、貴重な意見として今後の入試改善の検討に生かすとの回答であった。

地区校長会だより

上都賀地区中学校長会

本地区は、鹿沼市と日光市の2市で構成されており、県北から県央にかけて栃木県の約3分の1弱の広さを占めています。この広範な地域に鹿沼市10校、日光市14校、計24校の中学校が点在し、極小規模校から大規模校までそれぞれ様々な特色を成しながら、個性ある豊かな教育活動を行っております。

本会は、距離的に離れている24名の会員が年3回の定例会を介し、様々な研修や研究協議、情報交換等を重ねるとともに、県中学校長会や全日本中学校長会との連携を進め、その充実を図っております。

例年4月に本地区小学校長会と合同の研修会を実施し、地区内小中学校長が一堂に会して交流を深めるとともに、上都賀教育事務所長や担当課長等より県教委や教育事務所の方針などについて講話をいただいています。

また、定例研修会では、毎年関心の高いテーマに沿った講師をお招きして研修を深めたり、本地区が研究協議会等で発表を予定している研究課題に沿って調査研究を進めたりしています。ちなみに、昨年度は、元釜石小学校長の渡邊真龍氏をお招きして「災害に備えた学校経営」について学び、今年度は、栃木県子ども若者・引きこもり総合相談センターの中野謙作氏をお招きして「不登校生徒の理解と対応」について研修しました。

さらに、これらの研修会に加え懇親会も実施するなど会員同士の親睦や交流を深めながら校長会として本地区教育の充実に取り組んでいます。

今後、本地区においては、少子化に伴う学校の再編・統廃合が進み、会員数（学校数）の減少も予想されますが、これら様々な変化にもしっかりと対応していけるよう校長会として一致団結して取り組んでいきたいと思っています。

〔鹿沼市立北中学校長 金子 伸示〕

芳賀郡市中学校長会

芳賀地区は、真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町の1市4町、43校の校長から構成される芳賀郡市小中学校長会があります。そのうち小学校長会と中学校長会が組織されており、中学校15校の校長が中学校長会の会員となっています。

本校長会は、校長の教養と機能の向上を図り、本郡市教育の振興に寄与することを目的とし、年間6回の研修会を通して、教育実践の工夫・改善に努めています。研修会の前半は小学校長会との共催で、後半は中学校長会による開催となっています。組織力を生かしたスムーズな運営が行われ、それぞれの校長が率直な意見を述べたり、情報を提供したりするといった風通しのよい組織です。

今年度は外部講師による研修事業が2回行われました。1回目は、小中学校長会合同で、前益子町教育長 岡良一郎氏を講師としてお招きし、「私の生きがいー非日常的なことへの対応ー」と題して、ご

講話をいただきました。2回目は、中学校長会の事業として、3.11震災語り部 菅原貞芳氏（元中学校長）を講師としてお招きし、「乱にいて治を忘れず治にいて乱を忘れず～3.11から学んだこと・伝えたいこと～」と題して、ご講話をいただきました。この講話を通して学校経営は勿論のこと、校長としての在り方、校長としての人間性など根本的な部分を考えさせられる素晴らしい内容でした。

また、これらの研修会の他にも、年に何度か会員相互の親睦が深められる場があったり、芳賀郡市内の高等学校7校と中高連絡会を年2回開催し、貴重な意見交換や情報交換をすることで中高連携が深まったりしました。

これからも芳賀郡市中学校長会が仲睦まじく更なる会発展ができるよう校長間の連携を更に深め、各学校での望ましい学校経営を推進していきたいと思っています。

〔市貝町立市貝中学校長 永嶋 弘典〕

塩谷南那須地区中学校長会

塩谷南那須地区中学校長会は、矢板市、さくら市、那須烏山市、塩谷町、高根沢町、那珂川町の3市3町で構成されています。今年度からは、泉中学校が矢板中学校に統合されたことにより、11校の中学校（県立矢板東高校附属中学校を含めると12校）となりました。1000人を超す県内1の大規模校である氏家中学校を除けば、中規模校もしくは、小規模校の学校ということになります。今年度は、半数以上の方が会員として新しく入られたため、大きく顔ぶれが変わりました。

本会は、地区中学校教育の振興に資することを目的として年6回実施し、貴重な情報交換の場となっています。内容としては、①県中学校長会からの伝達（各部会ごと）②各種団体からの提案③学校運営上の諸問題についての研究協議④その他必要事項の主に4項目です。特に今年度は、令和6年度の県の

研究大会発表に向けて「職員研修」について各校の実践をもとに研究を進めているところです。さらに今年度は、県中文連の事務局として、県総合文化祭を本地区が担当することになり、協力をお願いしたところ、会員全員が顧問として、準備段階から運営に携わって頂き、無事開催することができました。

このように、決して多くの会員を有する地区ではありませんが、協議の時には忌憚なく意見を出し合い、侃々諤々となりながらも、決議したことは協力し合い、助け合うことができる、まさに「協働」する中学校長会です。コロナ禍においてもこの協働体制があったからこそ、乗り越えることができたと思います。「校長職は、孤独である。」とよく言われますが、本会が私にとって、どれだけ心の支えになってきたかわかりません。これは、会員の顔ぶれが大きく変わっても揺らぐことのない伝統です。これからもきっと脈々と引き継がれていくことでしょう。

【さくら市立喜連川中学校長 山口 昭子】

私の学校経営

地域とともに、主体的に行動する生徒の育成
～人づきあいを大切に～

上三川町立明治中学校長 吉 澤 勝

本校の学区は、昔から住んでいる方と新たに居住された方がうまく融合している地域であり、地域の方々の教育に対する関心も高いです。また、私自身が学区に居住する地域住民であるとともに、本校の卒業生でもあります。現在の校舎は私の在学中に新設されたもので、私にとっても友人との思い出が数多く残る懐かしい学び舎です。母校に勤務することに際し、懐かしさやうれしさを感じる反面、教育活動に対する地域の方々からの強い期待感を感じながら、本校の歴史と伝統を継承し、更に充実・発展させるため、「地域とともにある学校づくり」を推進していきたいと考えています。

1 SRP (School Revolution Project) 活動の推進

本校では、平成28年度より生徒会を中心にSRP活動を推進してきました。これは、「学習規律の確立」「生徒の自主的な活動の推進」「基本的な生活習慣の改善」を目標に、各専門委員会及

び各学年・学級単位で取り組む生徒主体の活動です。各活動単位で様々な活動の評価、課題の明確化、新たな実践を行うことにより、「学校をより良くする」「基本的なことを自分自身の判断の下で、できるようにする」等の意識が生徒の間に浸透してきました。今後もこの活動を継続していきたいと思います。

2 「人づきあいを大切に」をテーマに

これからの社会は更に先進テクノロジーが発展し、今以上に大きな変革が見られることでしょう。そのような時代の中で生きていくために大切なことのひとつが「人と人との結び付き」だと私は考えます。学校経営には、生徒、教職員、保護者、地域の方が互いに温かな人間関係で結ばれていることが大切です。教職員同士はもちろん、生徒、保護者、地域が相互に結び付き、人間関係力の育成を大切にした教育活動の推進を目指し、学校経営方針として発信しています。これからも、主体的に行動できる生徒の育成に向け、地域とともに取り組んでいく所存です。

文武両道を究めるために

野木町立野木中学校長 永 井 啓 之

本校は栃木県の最南端に位置する中学校で、今年で創立77年目を迎えました。平成2年4月に野木第二中学校が分離し、町内2中学校となりました。茨城県古河市と隣接し、埼玉県、群馬県ともほど近く、生徒の進路先は東京方面を含めて多くの都県にちらばっているというのは本校の特徴の一つです。

伝統的に文武両道を学校経営の柱とし、関東、全国大会での輝かしい歴史を誇り、敷地内にはその偉業を記した石碑が点在しています。卓球では全日本チャンピオンを2名も輩出。県内随一の敷地と施設を誇り、陸上競技場、テニスコート、野球場、ソフトボール場、サッカー場、弓道場がそれぞれ独立して整備され、加えて2つの体育館と武道場、屋内プールを完備。教室棟なども生徒数に対して十分な余裕があります。令和4年度には、本校の体育館がいちご一会とちぎ国体の女子ハンドボール競技会場となり、宮様をお迎えすることができました。

本校に着任して3年目。本校の伝統を大切にしつつ、次の3つのことを重点として学校経営に取り組んでいます。①「言葉にこだわる生徒の育成」を合言葉に、主役である生徒たちが多くの人から応援される若者として成長していくことを目指しています。学校教育は人間関係がすべての基盤です。生徒同士も想像力を磨き、相手を意識した言葉かけができるよう学び続けています。教職員も生徒にかける言葉が心に届く温かいものかどうか、自問自答を続けており、次第に浸透してきたところです。②「学びのUD化」を積極的に推進するために、生徒の実態に即して、振り返りを大切にしたわかる授業の展開を実践し、学力調査において結果が出始めています。③「SNS等で得られる誤った知識に負けない野木中生の育成」を目指し、ICT教育の推進と合わせた心の教育に力を入れています。

本気で頑張り続ける生徒たちを、本気で教職員や地域が支えていく本校の取り組みが、生徒たちの幸せにつながってほしいと祈り続けています。

豊かな心を持ち、自ら学ぶ生徒の育成

～一人一人の不安や悩みに気づき、支えられる教師～

足利市立第二中学校長 大 森 順 子

本校は市のほぼ中央を学区とし、行政機関や文教施設、日本最古の学校「足利学校」等の歴史的遺産が存在するなど、教育的環境に恵まれています。

1 地域とともにある学校

アフターコロナで、これまで以上に地域力を生かした特色ある教育活動を目指します。3年間の総合的な学習の時間を通して、活動を繋げ、より深く地域の人々と関わることで、「豊かな心」の具現である郷土愛や生徒の自信を育みます。1年の校外学習を「足利めぐり」に変更し、その後の活動でお世話になる地域の人々に触れ合える機会としました。2年のマイ・チャレンジでは受入れ先に市議会を新設し、3年での出前授業に繋がります。

- | | |
|----|-------------------------------|
| 1年 | 足利めぐり（まちの魅力の再発見）
地域の人々に学ぶ会 |
| 2年 | マイ・チャレンジ
（学区の28事業所で受入れ） |
| 3年 | 市議会出现授業
（足利のまちづくりへの提案） |

2 生徒を支えられる教師集団

まず、教員には、授業の中で、「わからないことがわからないと言える」関係づくりを基盤に据えるように常々お願いしています。中学生になると、なかなか自分からわからないと言えない、躊躇する子供もいますが、そのような子供に気付ける目を養う研修を行っています。そして、つまづいている子供に寄り添い、根気強く関わり続けるなかで、子供自らが教員へ学習での悩みを打ち明けられるようになっていきます。こうして、子供の「自ら学ぶ」意欲を育みます。そのため特別支援教育コーディネーターが教科担任に助言したり、学級担任と一緒に個別の教育指導計画を作成したりと専門性を発揮しています。授業で「わからないことを言える」関係から、「日常的な悩みを相談する」関係へ、そして、「いじめや差別を打ち明けられる」関係へとすることが最終的な教員の姿です。

試行錯誤の毎日ですが、このような取組を通して、子供たちが将来、困難を乗り越えながら、地域社会に貢献できる人間となるよう努めてまいります。

新任校長の一言

新任校長として

栃木市立寺尾中学校長 平 山 裕

寺尾中学校は、栃木市の西部に位置し、永野川が学校の隣を流れ、周りを山に囲まれた自然豊かな地域にある小規模の学校です。赴任する前に何度か訪問した際には、木々の緑を目にしながらの道のりで気持ちが穏やかになるのを感じたのを覚えています。4月、辞令を受け、緊張しながら赴任した私を、豊かな自然と同様、職員が温かく迎えてくれました。

振り返ってみると、4月は市や地区の校長会、様々な会議など学校を不在にすることが多く、先の見通しを十分に持てなかった自分には、生徒の活動の様子を見る時間を取ることが難しかったように思います。そんな中、新入生歓迎会では、本校の生徒たちの良さ、小規模校の強みを感じることができました。進行や学校行事等の紹介をする生徒会役員はもちろんですが、全校生徒が一緒に行うレクリエーションでは、役員以外の2、3年生が積極的に盛り上げたり、新入生に優しく声をかけたりするなど学

年を超えた交流ができ、一体感のある会となりました。学校づくりスローガンとして掲げている「だれ一人かけてはならない大切な仲間『寺中丸』」が、行事の中で実現されていると感じた瞬間でした。

本校の学校経営方針の一つに、「小規模校の特性を強みと捉え、全ての場面において生徒一人一人に寄り添う教育活動を展開し、小規模校の特性を生かした教育実践を推進する」があります。少人数であることは、生徒一人一人の活躍の場が多くなり、教員が一人一人に十分な時間を割くことができる。この強みを生徒、教職員が理解し、『寺中丸』の精神が浸透してこそ、集団への所属感、連帯感や愛校心が醸成され、様々な活動を通して、生徒が達成感や自己有用感を感じることができると考えています。

生徒たちが、将来、自分の個性を発揮し、互いに認め合い、よりよい社会を築いていくための自信や力を身に付けられるよう、職員と力を合わせて日々の教育実践に取り組んでいきたいと思っています。

新任校長として

大田原市立親園中学校長 萩 原 孝 夫

令和5年4月、新任校長として赴任した私を職員一同が玄関で温かく迎え入れてくれ、緊張が少しほぐれたことを覚えています。

本校は、2つの中学校（親園中学校と佐久山中学校）が統合され、平成30年4月に新たな親園中学校となって6年目を迎えました。歴代の校長先生方が築き上げてこられた歴史と伝統を受け継ぎ、微力ではありますが学校経営に全力で取り組んでいます。

自然に恵まれた田園地帯に位置する本校は、保護者や地域の方が学校教育に対して大変協力的です。10月には、全校生徒が地域の方とグラウンドゴルフを通して交流する行事を実施し、和気藹々とプレーを楽しみました。

さて、5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類感染症となり、様々な教育活動が制限を緩和して実施できるようになりました。これまで当たり前に

行ってきた集団的活動や体験的活動ができる喜びを生徒とともに感じつつ、「当たり前」に感謝するようにしています。また、単にコロナ禍前に戻すのではなく、学校教育活動のうち真に必要なものを回復し、新しい学びの在り方を模索することも大切だと感じています。

ここで、私が日頃から心掛けていることを2つ紹介させていただきます。1つ目は、ことばを大切にすることです。生徒や職員と話す場合には、伝える内容や伝え方、そしてどんなことばを使うかに心を配り、相手が納得できることばを模索しています。2つ目は、いつでも明るく元気で朗らかでいることです。人と接する際に笑顔であれば、相手に安心感を与え、生徒や職員そして保護者・地域の方にも必ずよい影響があると信じているからです。

この学校で出会った縁を大切にしながら、これからも子どもたちと職員のウェルビーイングを高めていけるよう努めていきたいと思っています。